



揮毫 伊藤茂男氏
鎌田地区
平成26年5月1日現在
世帯数 8,450戸
男女 9,647人
9,274人
発行者 西部公民館
公民館編集委員会

活気ある楽しいまちに



鎌田地区
町会連合会
会長 坪田 秀一

●新任あいさつ●

平成26年度町会連合会会長を仰せつかりました。よろしくお願ひいたします。

皆さんご承知のとおり、鎌田地区は、市内で最も人口規模が大きく、また町会によって抱えている課題も様々であります。町会への無関心化も大きな課題です。幸い4月からは鎌田地区地域づくりセンターも開設されましたので、その力を借りながら鎌田地区らしい地域づくりを進めていきたいと思っております。

地区内には、サッカーの松本山雅事務所もあり、それを取り入れた地域づくりや事業、一昨年行った地区全体の避難所運営訓練など、住民の皆さんが大勢参加でき、楽しみながら行っていくことが一番と考えております。「さすがは鎌田地区だな！」

な懸け橋」になるよう努めたいと思っております。どうぞよろしくお願ひいたします。
(征矢野町会)

●新任あいさつ●



鎌田地区地域づくりセンター
センター長
遠藤 彰

●新任あいさつ●

4月から鎌田地区地域づくりセンターが西部公民館の中に開設され、センター長に就任致しました。

地域づくりセンターは、公民館や福祉ひろばの活動の成果を活かしながら、町会を始めとした既存の自治組織を最大限活用し、鎌田地区らしい地域づくりを行うための拠点です。この地区の担当として通算で4年目となりますが、まだまだ地区のことを分かっていないのが実状です。

今後は今まで以上に地区や町会の行事などに積極的に参加し、色々なお話をさせていただきながら皆さんの声を良くお聞きし地域の問題点を見極めていきたいと思っております。皆さんと一緒に地区の課題に取り組み、「安心で住みよい地域」づくりに励みたいと思っておりますので、よろしくお願ひ致します。

街かどの話題 131

雪かき奮闘記 ~その後~



弥生町町会
公民館長 小林 嘉美

今年2月、2週続けて記録的な大雪に見舞われた。団地の敷地や駐車場(約200台分)に積もった雪を各戸でかいていたが、個人の力ではどうにもならず町会長が全戸に雪かきを呼びかけた。

最初の週は各組の入り口や公民館前の除雪、通学路の確保、駐輪場から自転車を出せるようにして終わった。団地周りの道路は市の除雪が入ると思っていたが、手が回らなかったまま次の大雪が降ってしまった。

弥生保育園前の市道は日陰になるため、前の週の雪が解けないまま圧雪の上に新しい雪が積もり車の通行が困難な状況だった。そこで各組の雪かきが終わった人に声を掛け道路の雪かきを協力してもらった。凍りついた圧雪をつるはして砕き、スコップでめくり剥がして花壇に積み上げたが、あまりの量の多さで雪の持つて行き場が無く道路の両側につみあげてしまった。

重労働だったが、子ども達が手伝ってくれ活気ある雪かきとなった。
3月の組長会でいろいろな反省点を話し合い、この冬までに雪かきについてのルールを整備することにした。

その後役員会で弥生町の今後について話しあった。若い世代が多く、住人の入れ替わりの激しい現状だが、町会を身近に感じてもらえるよういろいろなることを町会から仕掛け住人を巻き込んでいこう、ということになった。

手始めに団地で生まれ育った子どもに、大空に泳ぐこいのぼりを見せようと、町会長が実家から支柱とこいのぼりを持ってきて公民館前に建てた。少し時期がずれるが6月にはお年寄りを囲んで柏餅作りを計画している。



町会長が公民館の看板の裏に書いた「地域づくりは公民館から 自分たちの地域は自分たちの力で 安全安心で支えあいの心がつなぐまち」を合言葉により良い町会を作っていきたい。

福島は国民全体の問題

〜富岡町を訪ねて〜

鎌田地区町会連合会と町内公民館長連合会合同の福島県視察が、2月22日から1泊2日の日程で行われた。参加者は町会長8名、町内公民館長7名、公民館職員7名の22名。

まず、富岡町の仮設住宅の中に「おだがいさまセンター」を訪問した。「何かをやって新しい自分を見つけよう」ことを目標に10事業を展開している。①震災の語り人②広報「みでやっぺ」の発行③おだがいさまFM④おだがいさま工房⑤県内交流⑥県外交流⑦畑⑧ものづくり⑨こども広場⑩生涯学習

運営は町の社会福祉協議会がおこなっていて、月々約三千人もの利用者(男女ほぼ半数ずつ)があるというが、それでもメンバーが固定化する傾向が出てきているとい



郡山市内のおだがいさまセンター



まるで時間が止まったかのような富岡駅前

う。建物の外壁に大きく「おだがいさまセンター」と書かれているが、そこに「富岡町」の名前を入れないのは、町外の人でも気軽に利用できるという配慮であると聞いて、文字通り「おだがいさま」に限られた地域だけのものではないのだ、ということ強く印象づけられた。

次に、バスは浜通り海岸を広野町、檜葉町、富岡町を通って北上した。広野町では家の礎石だけが残った地区が見られ、津波の恐ろしさを物語っていた。富岡町では、町内各所に黄色の線量計が置かれていて、町内が帰還困難区域等に指定されているため、住民の姿は全く見られなかった。小学校に通じる通りの両側に植えられた桜の巨木に、子どもたちが書いた「桜の花が見たい」という紙が樹に吊り下げられていたのには、何ともやり

切れない思いにさせられた。最後に訪れた「浜風商店街」は、いわき市立久ノ浜第一小学校内に設けられ、2011年9月3日にオープン、11の商店が並んでいた。予定時間に遅れ、本来の営業時間を過ぎていたが、復興事務所含め、店舗を開けて待っていてくれて、心のこもった温かいコーヒーをいただいた心が和んだ。

夜、宿泊したホテルで開いた懇親会で、参加していた「おだがいさまセンター」の天野所長が「復興の原点はおだがいさまセンターです。被災者を決して一人ぼっちにしてはならない、人がつながっていくことこそ、大きなエネルギーになる」と語られたことに、強くうなずくことができた。

視察研修を終えて、参加した私たちにできることは「今の、この現実を一人でも多くの方々に知ってもらうこと、そして、息の長い協力や支援を続けていくこと」以外にはないことを知った。

過酷な現実とは、単に富岡町、福島県だけの問題ではない。日本中の、そして、世界中の人々が考え、行動していかねければならないことである、と強く訴えたい。

(横山新治)

● 西部公民館 講座 ●

放射能の危険性について学ぶ

あの3・11のちょうど3年後、日本チェルノブイリ連帯基金事務局長の神谷さだ子さんを講師に、勉強会が開かれた。今、何ができるか、安心・安全に暮らすためにはどうしたら良いかなど一緒に考える講座であった。神谷さんは何回もチェルノブイリへ足を運んでいて、その現状と福島の惨事を重ね合わせ、詳しく説明した。その後、質問を含めた対話となった。

参加者は、「原発は自然災害ではない、これからも注意深く見守っていきたい」、「身内に福島の人がいて今は近くにきて住んでいる。福島と言うだけで風評被害にあったりしている。」など深刻な問題もあると話していた。

その他にも、放射能の数字の見方や、キノコや果物などの調査の遅れ、人間以外の生物への影響など、色々な情報を正しく把握し、注意深く耳を傾けていく必要があることを学んだ。

林 清吉

昔ながらの味噌づくり挑戦

3月14日、4月4日の2回にわたり、昔ながらの味噌づくりを続けている近くの宮沢さんを講師に体験講座が開かれた。まず14日は大豆を煮てそれを手回しの味噌挽き機にかけて、つぶした。次におにぎり状に手で握って、味噌玉を作り、皆で編んだ縄で2個ずつゆわえて廊下へつるした。



3週間乾燥させた後、縄から取り出し、カビを洗い落とし、つぶしてから麴をまぜて仕込んだ。思ったより大量にできたので1人5kgずつ自宅へ持ち帰ることができた。

ある60代の女性は「こんなことは生まれて初めてのこと、味噌は買うものだとおもっていたのに、貴重な体験ができて嬉しい」と満面に笑みをうかべて話していた。

ほとんどの人が初体験で、楽しみながら作業ができた。半年後、1年後はきっとおいしい天然の味噌ができること間違いありません。

(文化委員会)